

ブリズベンから見たオーストラリア

井上 美智子

1. はじめに

2011年6月から2012年2月までの9ヶ月間、大学の海外研究派遣制度を利用して、オーストラリアでの在外研究を経験させていただきました。研究内容については他で見えていただくことにして、ここでは、オーストラリア暮らしのあれこれについてご紹介します。

2. 州が違えば

オーストラリアといっても州制度を取っているのです、どの州で暮らしたのかによっていろいろなことが違うようです。私が暮らしたのは緯度でいうと沖縄くらいにある亜熱帯のクィーンズランド州の州都ブリズベンです。日本の外務省の公式表記はブリスベンですが、こちらの人はブリズベンとっています。オーストラリアでよく知られている街といえばシドニー（ニューサウスウェールズ州）、メルボルン（ヴィクトリア州）、キャンベラ（連邦首都としての特別区）ではないでしょうか。これらの街はさらに南の方にあるので、温帯地域になります。

緯度の違いは、生活のあらゆるところに現れています。まず、食べ物。クィーンズランド州はマカダミアナッツの原産地であり、季節になると収穫したものが出回ります。バナナやマンゴーも庭にあたりして「バナナはなるんだけど、先に動物が取るのよね」「子どもの頃はそこの辺でマンゴーを取って食べたわよ」と教えてもらいました。パイナップルもファーマーズマーケットに行けば、3ドルくらいで生産者から買えるし、カスタードアップルやパパイア、パッションフルーツなどトロピカルフルーツといわれるものもオーストラリア産が売っています。一方、チーズやワインは南の方が産地です。

家の様式も違います。クィーンズランド州は暑いので、クィーンズランダー様式と呼ばれる高床式の家が多いです。床下を風が通るように作られてあり、また、格子で囲まれたベランダが必ずあって部屋を開けっ放しにしたまま家の中を風が抜ける構造になっています。各部屋のドアの上にも風通し用の欄間のようなものがあります。私の暮らした家も1920年代の美しいクィーンズランダー様式でした。何年代の家なのかは様式を見ただけでわかるとのことで、こうした家の持ち主たちは年代やデザインを自慢しあっています。もっとも最近ではエアコンが普及しているので、多くの家はデザインだけそのままに、1階の空間をガレージや物置、子ども部屋などに改装して使っています。

また、連邦法はあるのですが、細かな法律は州ごとに違うようです。教育制度も州によって微妙に違い、私の研究対象である幼児期の施設などは、州によって名前も違います。私の暮らしたクィーンズランドは年度初めに3.5~4.5才の子どもが通うのがKindergartenで、4.5~5.5才の子どもが通うのがPrepです。ところが、シドニーのあるニューサウスウェールズ州では前者がPreschool、後者がKindergar-



住宅の庭先に実るバナナ

ten です。つまり、オーストラリアの幼稚園といっても、気をつけないと対象年齢や目的の異なる施設を指していることになります。

ブリズベンには、私の街、神戸の姉妹都市の一つでもあり、私個人とまわりの人の感想ですが、よく知られているシドニーやメルボルンに比べると、少し田舎っぽいような、関西っぽいような、そして、フレンドリーな印象があります。神戸人・関西人の私はもちろんブリズベン派です。



クィーンズランダー様式の家

3. 多文化社会

私が子どもの頃は、歴史の教科書で「白豪主義」という言葉を知りましたが、1970年代以降オーストラリアは公式にも多文化主義を採用しています。実際に、それだけいろいろな人が暮らしていて、国民の3割が海外生まれなのです。20世紀に移住してきた各地の人も多いのですが、留学生や一時的な働き手として入ってきている人も多いです。

元々オーストラリアに暮らしていた Australian は、アボリジナル (Aboriginal) と総称される人々とトレス海峡諸島民 (Torres Strait Islander) です。現生人類がアフリカで誕生して以降、そこから世界に人類は広がっていったと考えられていますが、その頃からオーストラリアに移動してきた人間の子孫であるので、彼らが本当の意味の先住民です。18世紀以降、イギリスの植民地となったことでオーストラリアは、西洋人の国家であるという歴史を作り始めます。そこから先住民に対する虐殺・同化政策という負の歴史が始まりますが、オーストラリア政府が初めてアボリジナルに謝罪したのは2008年のことでした。このときの首相が Kevin Rudd で、ブリズベンから北に車で1時間半ほどで行けるサンシャインコースト出身の人です。Rudd は京都議定書に調印し、アボリジナルに謝罪をしたということで、私のようなものでも知っている政治家です。どこの国でもそうですが、社会的に虐げられた層は結果として様々な問題を抱えてしまうので、そうした人々に対する施策は重要で、オーストラリアでも教育分野では先住民に対する教育が常に優先課題としてあげられています。ちなみに、オーストラリア多文化主義の父と呼ばれる政治家の Al Grassby もブリズベン出身です。という、そのような人ばかり排出しているのかと思いきや、反多文化主義を掲げワン・ネイション党を立ち上げた Pauline Hanson もブリズベン出身です。

西洋系ではギリシャやイタリアからの移民が多く、東洋系では中国やベトナムからでしょうか。2006年のセンサスでは、家庭で話される言語のうち英語以外で多いトップ5はイタリア語・ギリシャ語・広東語・アラビア語・北京語だったようです。こちらにいる間に人気のあったドラマが、日本のNHKにあたるABC放送で放映された“Slap”でした。メルボルン生まれのオーストラリアの作家 Christos Tsiolkas が書いた小説が原作なのですが、ギリシャ移民の家族を中心に多様な文化的背景を持つ人々が共に暮らす中で家族・家庭に関わる問題を描いたものでした。Tsiolkas 自身、名前を見てもわかる通り、Greek Australian です。また、私が在住している間に二人の Anglo-Australian の知人の息子さんがそれぞれ婚約されたのですが、一人のお相手は台湾から20年前に移住してきた Taiwanese Australian の娘さんで、もう一人はアメリカからこちらの大学に留学していた Chinese American の学生でした。幼稚園や学校に見学に行

っても、1クラスに一人くらい片親が日本人という子どもに出会いました。オーストラリアで暮らすということは、私的にも公的にも多様な文化的背景を持つ人と共にいるということになります。そして、自分が生まれ育った文化を大事にしつつ、一方で、誰もが Greek だの Anglo だのをつけない Australian であることをめざしているという感じでしょうか。

私がお世話になった大学は Queensland University of Technology (通称 QUT) ですが、3割が国際的な学生で、キャンパス内を歩いても本当に様々な民族に出会います。留学生はオーストラリア国民の学生の4倍の学費を払わなければならないのですが、それでもかなりの留学生がいます。一番多いのが中国人です。学生を見ていると同じ国の学生同士で固まっていることが多く、自国語で仲間と話している姿もよく見えます。授業にいくつか出たのですが、手を上げて発言するのはほとんど西洋系の学生で、東洋系の学生がそうする姿を見ませんでした。一つは言語の壁、もう一つは文化の違いのようです。



クィーンズランド工科大学教育学部

4. ことば

オーストラリア英語はイギリス英語を起源に、こちらにしか見られない特徴があるともいわれます。オーストラリア英語でよくいわれるのが、発音の違いです。これは本当にそうで、私のようなアメリカ英語を学んできた英語のできない日本人にとっては、聞き取ったオーストラリア英語をアメリカ英語に置き換え、それから意味を取るといったような感じで理解することになります。「スパイス」と聞き取って、ナツメグとかシナモンとかの「スパイス?」と思いきや“space”だったり、「ショア」と聞き取って、「浜辺?」と思いきや“sure”だったり。ただし、こうしたところも徐々に変化してきているようです。一つの理由は、都会に住んでいる人や若い世代はアメリカ英語に近い発音をするようになってきているようで、よくオーストラリアを紹介する本に書かれる「グッドデイ (G'day)」も、私の家主さん曰く田舎に行かないと聞くことができないとのこと。実際に私もこの挨拶はバスの運転手さんがするような商業用の挨拶以外には旅先のトレイルで出会った年配の男性からしか聞いたことがありません。日本でも関西人の私が沖縄や青森で地元の人同士がしゃべっているのを聞き取れないのと同様に、こちらでも北の方の人同士が話しているとわからないそうです。

もう一つは、上にも書いた多文化社会の影響です。一度、バス停でインドから来たという同年配らしき女性と一緒にいました。家族とともに来て3年目という彼女は学校に行っているとのことでした。どちらも片言の英語でわかったような、わからないような会話をしました。買い物に行っても、店員さんが Anglo-Australian とは限らず、外国語風の英語を話す人が結構います。テレビのニュースでもレポーターの英語が外国語風ということもよくあります。85%の職場には4カ国の出身者が働いているという報告が12年前になされていて、今ではその割合はもっと多いことでしょう。そういうこともあって、こちらの人々は英語が聞き取れないことやたどたどしい英語に対して非常に寛容で、わかろうと努力をしてくれます。そうでないと、多文化社会が成立しないのです。

多文化社会であるだけに、小学校から「英語以外の言語」を学びます。外国語ではありません。通常の学校で教えられている言語だけで 100 を超えるそうですが、実際にはフランス語、ドイツ語、イタリア語、ギリシア語、ベトナム語が多いようです。私が見学に行った小学校でも 1 年生のクラスにお邪魔したら、ちょうどイタリア語を学ぶ時間でした。週に 2 回、イタリア語教師が来て 30 分ほどの授業をするように、イタリア政府からの補助を受けているとのこと。また、中国語、インドネシア語、日本語、韓国語は優先アジア言語とされていた時期もあり、高学年では半数近い子どもがこれらの言語を学ぶといわれています。その結果、簡単な日本語を知っている人は多く、一度、家にセンサスの用紙を届けに来た西洋人女性に、私は日本人なので英語がわかりませんといったら、たどたどしいけれどもしっかりした日本語で説明されて驚いたことがありました。その女性は自分の子どもと犬と一緒に回っていて、帰り際には小学生と思われる子どもが「さよなら〜」と手を振ってくれて、またびっくり。オーストラリアの言語教育の目的は、その言語を使えるようになるというより異文化を学び、多様な文化的背景を持つ人と暮らしていくためという印象を受けました。私はこちらに来るときに、あえて日本と関わらない生活をしてみようと考えていました。それでも、あちらこちらで日本と出会います。日本に住んだことがある、家族が住んでいるという人が多いのです。国としての政策としてであっても、オーストラリアが日本に向けているだけの関心を日本の方は持っていないのではないかと感じる機会にもなりました。

5. 食べもの

オーストラリア料理というと、イギリスのロースト系の料理が基本なのかもしれません。ローストラム、ジャガイモやカボチャなど野菜のロースト、グレーヴィソース、カリフラワーのホワイトソースチーズ焼きというのが私の家主さんのローストディナーでした。フィッシュ&チップスもイギリスの伝統ですが、よく見ます。あとは、オーストラリアというと一家に一瓶といわれるベジマイト。これは、確かに、私の家主さんの冷蔵庫にもあり、時々、思い出したようにパンに塗って食べておられます。オーストラリアに来たら味見をしようと思っていたので、少しいただきました。進んで食べようとは思いませんでしたが、違和感はありません。日本から来た友人が蕎麦の薑味噛みたいといったのですが、確かにそんな感じです。

移民の多い国なので、料理も多国籍です。レストランもイタリア、ギリシャ、トルコ、インド、タイ、ベトナム、中華が多いです。テイクアウトでは Sushi が人気で、どこに行っても Sushi 店があり、オフィス街では昼ご飯を買う人が並んでいます。ここで寿司と書かずに Sushi にしているのは、やはり、日本のお寿司とは違うからです。細巻きを半分に切ったサイズのものが主流でツナやアボカドが入っています。私は Australian Sushi は一度食べたきりです。日本食レストランもありますが、行ったことはありません。高級日本食店でアルバイトをしている人の話では、やはり食材が違うので、本当の意味では近づけないとのこと。同様のことは韓国から来た人からも聞いたことがあって、本格的な韓国料理店でも本国で食べるのとは違うとのことでした。日本で食べる各国料理が日本人好みにアレンジされているように、こちらでもオーストラリアの人々が好むようにアレンジされているのでしょう。家主さんの作るものを見ても実に多国籍です。考えてみると、日本でも家庭で作る料理は、完璧な和食というより、今や多国籍です。

では、完全にオーストラリア風の食事にしたのかというと、そうではありません。普通のスーパーにもエスニック食材のコーナーが必ずあり、日本の製品でいえば醤油やラーメン、カレー・ルー、のり、マヨ

ネーズなどが売っています。また、中国人の在住率の高い地区があり、中国食材のスーパーには必ず韓国と日本の食材も一緒に売っています。米やみりん、ごま、揚げなどはそういう店に買いに行きました。また、野菜も白菜やチンゲンサイ、ネギは普通のスーパーでも買えるし、キャベツやカリフラワー、ブロッコリーなどは同じです。違うのは、イモやカボチャ、トマト、キュウリなどでしょうか。始めはこちらの野菜は大味でまずいと思っていたのですが、家主さんの作るロースト料理をいただくと、とてもおいしいのです。つまり、料理にあわせてその味を引き出せるようなものが売られているということ。単に、和風にするとあわないということのようです。

私はこちらに来て楽しんだのは、オーストラリア産のトロピカルフルーツの他には、イタリア系とギリシャ系の食べ物でした。ごく普通のスーパーで、ラザーニャやフェットチーネ等の生パスタ、様々なタイプの缶トマト、ドライトマト、ギリシャ系ではフェタチーズやハルミチーズが買えます。チーズも日本に比べると種類も多く安いので、パルミジャーノやカマンベール、ブルーチーズと、オーストラリア産のものを選んで買いました。クィーンズランドもいくつかチーズファクトリーがあるのですが、いろいろ食べてみて気に入ったのはタスマニアやヴィクトリアのチーズでした。日本でいうと、北海道産・東北産という感じでしょうか。

ということで、食べ物に困ることはなかったのですが、夏休みにこちらに来た友人に「何か持ってきて欲しいものはある？」と聞かれて持ってきてもらったのが、お気に入りのケーキ屋さんの焼き菓子とコーヒーの一人用ドリッパーでした。こちらのケーキは基本がバターケーキ。ケーキ自体も甘くオイリーな上に、砂糖とバターがたっぷりのアイシングが大量に乗せてあります。一つ買っても半分を昼食代わりにするというような感じでした。時々フレンチスタイルのケーキ屋さんを見つけて食べるのですが、それでも大きかったり、甘かったり。クッキーはドロップ式の素朴なものですが、甘く巨大です。そこで、日本の繊細な焼き菓子が食べたくなります。また、若い世代はコーヒーの方を好むようになってきているといわれても、紅茶かコーヒーかといわれて紅茶を選ぶ人が多く、スーパーでも紅茶の方が広い場所を取っています。レギュラーコーヒーは売っていますが、入れ方は基本がフレンチプレス。ペーパーフィルターはひっそりと棚の上の方にあり、大きいサイズしかなく高いです。日本では個包装の1杯用ドリップコーヒーが売っていますが、こちらではティーバッグ式しかみあたりません。私はドリップ式の方が好みなので、一人用のドリッパーを持ってきてもらったのです。

6. ワイルドライフ

地球上の大陸は過去に離合集散を繰り返してきたと考えられていますが、オーストラリアは直近の超大陸時代が終わって南極大陸と共に最初に離れた大陸で、生物相において特殊であるのはそのためとされています。特に、ほ乳類が全く違います。他の大陸ではいなくなってしまう有袋類が残って進化したとい



手作りのスティッキー・デイツ・プディング
ダブルクリーム・バタースコッチソース添え

う点、化石が残っていないためにあまりよくわかっていない単孔類がいるという点です。は虫類や鳥類も豊かで日本の動物相と全く違うところが魅力で、動物好きにはたまらない場所です。

オーストラリアに行くことが決まったとき、いろいろな動物を見たいと思いました。「見たい」というのは、「野生の」という意味です。同じ動物を見るのでも、野生で見るのと動物園で見るとでは動物の表情も動きも違い、感動が違います。オーストラリアの動物といえば、多くの人はカンガルーとコアラを思い浮かべるのではないでしょうか。どちらも都心部からそう離れていなくても生息地に行けば比較的簡単に見られます。カンガルーは群れているし、身体も大きいので、野生で出会うと存在感があります。自宅の庭で子どもがカンガルーにけがをさせられたというようなニュースが流れることもありました。ただ、ユーカリ林に暮らすコアラは木の高いところにおいて1日中ほとんど動かないので、地表にいるカンガルーよりも出会うのは難しいようです。自然保護区を歩いていて、ごく普通に見られるのがワラビーです。岩場、ユーカリ林、レインフォレストと環境によって違う種が暮らしているので、4種類ほど見ることができました。ワラビーはどちらかというと単独性の種で、身体も小さいのですが、林床を移動する音で見つけやすいのです。ほ乳類では他にハリモグラとポッサム、有袋類ではありませんが、アシカ、オットセイ、イルカ、クジラも見ました。残念ながら野生のカモノハシには、夜行性であること・水中での行動が多いことから出会うことはできませんでした。

鳥類も当然ながら日本とは異なりますが、特に違いを感じさせてくれるのがインコ類です。色鮮やかなレインボー・ロリキートはスズメのごとく身近にいて、こちらの人は誰も目を留めません。しかし、最も色鮮やかで美しいインコです。ハトより大きなインコ類もごく普通に暮らしていて、街中の公園でも大木のうろを巣穴にしています。大型のカワセミの一つであるカカバラも形はまさしくカワセミなのですが、魚食ではないのでよく庭に遊びに来ます。ダチョウの仲間のエミューはさすがに郊外の国立公園に行ったときにしか出会えませんでした。ダチョウの仲間だけあって、大きな鳥です。私が気に入ったのはリトル・コレラという白いインコ。顔がとてもかわいいです。

は虫類もさすが亜熱帯で、まず、野生のワニがいます。もちろん、北部の熱帯に近いところに行かないと会えないのですが、夏休みに見に行ってきました。カカドゥ国立公園ではワニの生息域であるため、川での遊泳も川岸に近づくことも禁止されています。ケアンズという街で、ワニが道路を歩いていて警察が保護したというような話がニュースになっていました。ブリズベン市内ではヒガシウォータードラゴンという大型のトカゲが春になったら冬眠から目覚めてきて、水の近いところでよく見られます。他



野生のコアラ



野生のリトル・コレラ

にも大型のトカゲが何種類かいます。ヘビもパイソンという大型のヘビがいて、やや郊外に住んでいる人からは「昨日、玄関を出たらこんなに大きなパイソンが横たわっていたのよ」というような話を普通に聞きます。もちろん、毒ヘビもいるので、時々ヘビにかまれて死亡というようなニュースを見ました。もともと野生生物による死亡事故で一番多いのはハチだそうですから、日本と同じです。

植物ももちろん違います。亜熱帯のレインフォレストはシドニーやメルボルンでは見られません。ブリズベンには少し郊外に出るとすばらしいレインフォレストがあります。日本から来て目を引くのは、木生シダです。4億年から3億年前に栄えていた植物で、木生シダの茂る森を歩くと、別世界に来たような気がします。亜熱帯の霧雨の園芸種ハイビスカスやブーゲンビリアは庭先にごく普通に見られますし、日本では冬になると温室に入れないと育たないビカクシダやランの仲間が野生で見られます。10月にはジャカランダという紫の花が咲く木が街を彩ります。元々は南米原産ですが、街路樹や公園の植栽によく使われており、桜のように花が先に咲いて、後から葉が出てきます。日本では桜が咲いたら本格的な春だなと思いますが、こちらではジャカランダが咲いたら夏が来たと思うそうです。他にも全体に深紅の花をつける木や黄色の花をつける木など、色が鮮やかです。

7. オーストラリア暮らしの謎

オーストラリアに来る前に、何冊か本を読んだのですが、その中で紹介されていたことのひとつが、食器を流水で洗わないということでした。西洋文化圏では珍しくないようで、洗剤を溶かした水をためたシンクに食器をつけておき、水をためたシンクにさっとつけて終わりです。これは実際に私が住んだ家でも家主さんを見ているとその通りで、オーストラリアでホームステイ経験のある日本人に聞いてもそのようです。目に見える汚れがしっかりと取れていなくても気にならないようで、洗剤コートされた食器が食器棚に並んでいます。食器洗い機を使っていない田舎のカフェなどでも同様です。それだったら、洗剤を使わずに、アクリルたわしなどで汚れを取った方がいいのではないかと思いましたが、何のために洗剤を使っているのかを考えると、多くの洗剤は99%の殺菌力を自慢にしており、殺菌の目的があるようです。日本から来た私はやっぱり嫌で、オーストラリアに送る荷物の中にアクリルたわしを入れ、洗剤を使わず流水で洗いました。どちらが良い悪いという意味ではなく、これは文化による違いで、ウィキペディアのDishwashingの項目をみると、流水で洗うのはアジアと南米の文化だそうです。

もう一つ、別の本でオーストラリア人は旅行に行くときに枕を抱えているという記事を読みました。といいながら、飛行場などでそういう人に出会ったかということ、二人だけ。どちらも家族旅行をしているとおぼしき30代の人でしたが、荷物とは別に確かに大きな枕を抱えていました。印象としてどの人も荷物が多く、家族で旅行していても、親も子どもも荷物を持っています。幼稚園でもお昼寝があるのですが、性別に関わらず多くの子どもがぬいぐるみを持ってきていて、ぬいぐるみを片手に登園という子どももよく見ます。枕はぬいぐるみの大人版なのかなどと失礼にも思っていました。とはいえ、日頃、細々と荷物を持つのは嫌なようです。少々の雨なら傘なしで歩いている人が多く、雨に濡れるのが好きだと思っていたところの人によると、「単に傘を持ってくるのが面倒なのよ」という答えをもらったことがあります。また、別の人からは、「日本に行ったとき、少しの雨でもみんな傘を差していて、素敵だった」といわれたことがありました。

幼稚園の園庭で遊んでいる子どもを見ているとほとんどが裸足です。日本でも裸足保育があるので、そ

の方が子どもの発達にとってよいからかなと思ったので、その理由を聞いてみました。すると、私がお世話になっていた大学の幼児教育学科の先生はう〜んと考え込んで、発達によいというのはいわれているけれど、クィーンズランドの場合は単なる習慣という答え。「とにかく暑いので靴は履かないのよ」とのことです。確かに、春以降は街の中でもどこでも多くの人がゴム草履やサンダルを履いています。私の家主さんも家の中では裸足です。日本のように家では靴を脱ぐという意味ではなさそうで、単に靴が嫌という感じでした。



家の近くから見たブリズベン中心地

彼女は「ケアンズに行けば、夏はみんな裸足で外を歩いているわ」といっていましたが、何でも夏は雨期で道路も冠水するからというのが理由の一つのことです。本当なのでしょうか。他の家にお邪魔したときも、家族全員、家の中も森のような広い庭もすべて裸足で過ごしていました。

外出先でトイレに行くと、どのようなところでもペーパータオルかハンドドライヤーがあります。だから、こちらの人が手を拭くためのハンカチを使っているのを見たことがありません。ペーパータオルはゴミになるし、ハンドドライヤーは電気で動いています。ハンカチも洗濯を考えるとエネルギーを使うのですが、他のものと一緒に洗濯するので、一番エネルギー使用量が少ないと思います。また、西洋系の人は身体が大きいこともあると思いますが、暑がりです。6月から8月がオーストラリアの冬です。コートを着てブーツを履き、マフラーを巻いて寒そうにしている人もいれば、半袖 T シャツにハーフパンツという人もいて、そういう二人が友達どうしで並んで歩いていることもあります。最も暑がりの人にあわせているのか、冬でもバスに乗ると冷房になっていたりします。設定温度はかなり低いようで、私の家主さんの冷房の設定温度も 16℃ でした。環境教育の意識の高いある保育園では冷房の設定温度を 28℃ にしていると保護者からのクレームがすごいと嘆いておられました。オーストラリアは一人あたりの二酸化炭素排出量がアメリカと並んで世界の 1 位・2 位を争う国なのです。また、食べ物はたくさんがあるのが望ましいという感覚があるのか、レストランなどではたくさん食べる人にあわせているようで量が多いです。西洋系の人もスリムな人は大食ではないので、たいてい残っていて、それらはすべてゴミになります。また、多くの方は食べ物を捨てることに抵抗がないようです。結果として当たり前のように食べ物が捨てられていきます。2011 年に FOOD AND AGRICULTURE ORGANIZATION OF THE UNITED NATIONS (FAO) が出した報告 “Global Food Losses and Waste” でも、北米・オセアニアの先進国はアジアの先進国よりも食物廃棄が多いと報告されています。一方で、日本は過剰包装の国だといわれますが、本当にその通りで、オーストラリアではケーキ屋さんに行っても印刷のないシンプルな紙袋に入れるだけで、二重包装などしません。

8. 9ヶ月のブリズベン暮らしを終えて

オーストラリアの人がよく使うのが “No Worries” という言葉です。いい意味でも悪い意味でもオーストラリアの歴史と厳しい自然が生み出したものという気がします。そういわれて、「ありがとう」と思う

ことが多いのですが、「はいはい、そうですか」と思うこともあります。私の滞在中にアメリカの Barack Obama 大統領が来豪したのですが、その際の議会演説で、子どもの頃にオーストラリアを訪れたことに触れ、オーストラリア人の“optimism and easy going ways”が深く印象に残っているとっていました。本当にその通りで、オーストラリアの居心地のよさはそこから来ており、こちらに移住している日本人が魅力を感じているところでもあるようです。

研究を発展させたいという思いと長期の海外出張による様々なことを天秤にかけて悩みに悩んだ末の渡豪でしたが、研究面でも文化という概念をとらえ直すという点でも意義のあるものでした。多くの日本人が海外で活躍している事実はあるものの、人口に対する留学生の割合等で比較すると日本の若い世代が中国や韓国より内向き志向であることは数字が示しています。ツアーで訪れるのと短期間でも「生活」をするのでは経験の質が全く違います。学生のみなさんもそれ以外のみなさんも、是非機会を見つけて異なる社会を経験し、言い古された表現ですが、視野を広げてもらいたいと思います。最後になりましたが、応援・協力して下さったすべての方々に感謝申し上げます。